

大嶋伸雄 編著

作業療法カウンセリング

藤井博之（長野大学社会福祉学部教授/佐久総合病院リハビリテーション科医師）

本書は日本人の「思考」と「行動」の特性を踏まえた作業療法カウンセリングについて、原則と基礎概念から実践に至るまで体系的に解説した技術書であり、理論書でもある。編著者である大嶋伸雄氏は、認知作業療法を日本で牽引し、多くの人材を育ててきたことで知られ、本書の執筆陣の構成にもこれらの実績が反映されている。

通読すると、作業療法カウンセリングは、作業療法のさまざまな方法、モデルと対立するものではなく、むしろそれらをつないでいくシンプルで応用可能性の高い方法であることがわかる。

同時に、医療を含む幅広い対人援助の分野で問われている、患者・クライアントが主体となって進める臨床の在り方に、実践的な枠組みをも提起しているのが、本書の特長である。

本書は第1部「日本人のための認知作業療法」、第2部「作業療法カウンセリング—基礎編」、第3部「作業療法カウンセリング—実践編」、第4部「作業療法カウンセリング—事例編」で構成される。

作業療法は「訓練」でいいのか？

初めに理論書としての本書の特長に触れよう。

「個人的あるいは社会的に意味のある作業」を健康状態の改善に結び付けていくのが作業療法だとすれば、療法士の計画に患者が従うことを求める訓練的アプローチだけでは限界が生じる。特に「自ら主体性を発揮できない患者」が、主体的に訓練に取り組む状況をつくるのは難しい。ここで訓練を治療と読み替えれば、ほとんどすべての医療者がこうした場面に合う。

そんなときに「私があなたを治してやる」と公言し、ましてや治療が進まない理由を患者の性格に求める医師や療法士などもある。それが赦されているのは、医療者から患者への働きかけについて共有されている技術がいかに未熟であるか、その表れといえる。

ここに正面から切り込むのが本書である。「すべてのクライアントに作業療法カウンセリングが必須」、「心と身体と一緒に診る」といった言葉遣い、中でも「リハビリテーションを行うのは誰か？」と問いかけ、それに「患者自身である」と応答している点などに、編著者たちの構えが読み取れる。

患者との対話と具体的な「作業」を結び付ける

本書を技術書として、特に認知作業療法と作業療法カウンセリングを初めて学ぶ臨床家にとっては、第3部「実践編」、第4部「事例編」から読むほうが理解しやすいかもしれない。作業療法カウンセリングが、実際の臨床の展開過程のどのような時期にどう行われ、作業療法士のさまざまな技術を適用して、見通しのある作業療法のプロセスを紡ぎ出していくか、そのイメージをつかむことができる。

もとより作業療法は、多くの手法、技術を備える歴史ある専門分野である。作業療法カウンセリングの基本と実際を知ること、作業療法士が患者との対話を通じて、参加・活動の獲得に結び付ける具体的な援助方法の枠組みの中に、これまで行使してきた専門技術を位置づけ直すことができる。それが、いわゆる精神科領域、身体領域、地域ケアや高齢者ケアなどの領域に蛸壺化しない、それらをまたいだ作業療法の基本的枠組みとして示されていることも、本書の特長といえる。

対人援助の基盤となる成果物

在宅医療とリハビリテーション診療に従事してきた医師である評者からは、本書が掲げる作業療法の方向性は、患者中心の診療（patient centered practice）や価値観を基盤とする診療（values based practice）と軌を一にしているようにみえる。医療やリハビリテーションの在り方が変わろうとしている大きなうねりを構成する波の一つである。

作業療法士には、そうした医療の先頭に立つ資格がある。なぜならば、occupation、つまり人の生きる役割、社会で占める位置を専門性の中核に置いて、働き考え悩み続けてきた専門職だからである。作業療法士の職域が医療、介護だけでなく、学校、就労支援、さらに生き甲斐づくりなど、広範な分野に広がることへの本書の示唆にも、共感する。

身体、精神、地域など、あらゆる分野で働く作業療法士だけでなく、それ以外の多くの医療職にも本書が読まれ、対人援助職の共通の財産になることを期待したい。

（B5 頁352 2020年 定価：4,950円（本体4,500円＋税10%）[ISBN978-4-89590-668-5] 三輪書店刊）